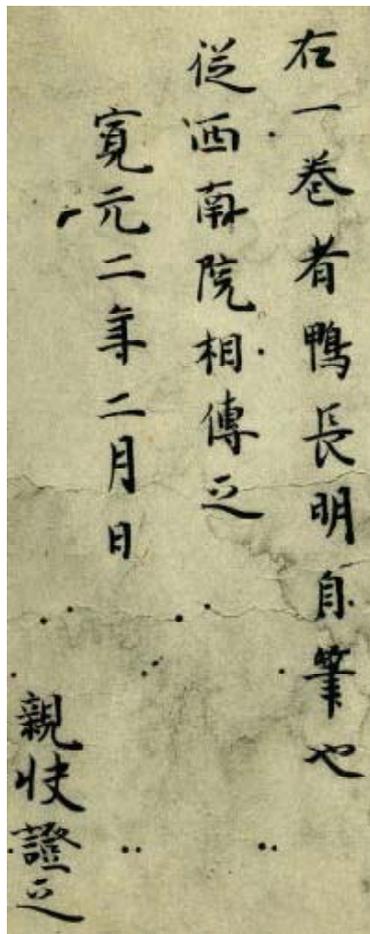


# 鴨長明自筆本『方丈記』について

萩原 義雄

隨筆文学として、先行する王朝時代の清少納言『枕草子』が宮廷女房の教養性を帯びた百科事書風の書物であるのに対し、王朝的和歌の余韻・余情性と中世風な論理性の作品構成とが綾織りだされていて、中世の無常観を反映された文学作品であることはよく知られた事柄である。

この長明自筆本『方丈記』は、広本系古写本として本書最古の伝本である。書写年代は、鎌倉中期以前で、卷子本一軸の体裁で、重要文化財に指定されている。この大福光寺本の奥書には、



とあって、本書成立の建暦二年(一一二二)三月から隔つこと三十二年の寛元二年(一二四四)二月日に「親杖證之」と記述するものだが、実のところ、龍門文庫摸寫本によれば、江戸期修理の際にこの奥書の箇所を書き改めていて、修理以前は、「寛元四年十一月十二日親杖判」とあったという。しかし、長明没後三十年に満たないこの時期に醍醐寺遍智院の高僧「親快」〔建治二年五月廿六日寂、『本朝高僧傳』卷第十五所載〕が「右一卷者鴨長明自筆也」と証明しているのであり、次の行には「從西南院相傳之」としている傍証も見逃せない。これに対し、流布本系の①真字本、②延徳本、③長享本は、大火・大

風・遷都・飢饉・疫病・地震といった天災・人災の記事を欠文にし、逆に、流布本系には地震の際に、武士の子どもが圧死する記事が見えたり、方丈の庵の説明描写部分が異なったりしている。さらに、②延徳本は、折琴・繼琵琶の記事を欠文する。③長享本は、炎王呵責の記事を欠文する。いま、多くの校訂本文の底本として用いられている大福光寺本は、誤脱文字の箇所として次の十一例が指摘できる。



6行 ツキセヌ物ナレト是ヲコトカト尋レ  
ハ昔シアリシ ※「マ」を脱字補入。



14行 ソノアルシ○スミカト無常ヲアラソフ  
サマイハ、アサカ



69行 トマリヲリノキラアラソヒシ人ノスマヒ日  
ヲハツ、アレ ※「フ」を「ヒ」に訂正上書きする。



89行 リケレハヲナシ○年ノ冬ナヲコノ京ニ歸リ  
給ニキ ※「ヲナシキ」の「キ」を脱字補入。



203行 ノヲツクリ老タルカイコトシユヲイトナム  
カコトシ是 ※「蚕の繭」の「マ」を脱字補入。



243行 コノ山モリカナル所也カシコニコワラハア  
リトキ ○タリ ※踊り字の後に脱字「キ」を補足する。



258行 仏ニタテマツリカツハ家ツトニス若夜シツ  
カナレハイト ※「ニ」と「ト」との助詞の用法。



264行 シル或ハ又ウツ○火ヲカキヲコシテヲイノネサメノ  
トモト ※「うづみ火」の「ミ」を脱字補入。



292行 顧アツキヲサキトス更ニハク、ミアハレムト  
ヤスクシツカナ ※「ク、ミ」の「ク」太字漢字表記記載の補正。



294行 婢トスルナラハ君○スヘキ事アレハスナハチヲノカ身ヲ  
※「ナス」の「ナ」を脱字補入。



325行 林ニマシハル〇心ヲ、サメテ道ヲ、コナハクヨ  
ヲノカレテ山 ※係助詞「ハ」を脱字補入。

この十一例とも、補入文字は凡て本文と同筆であり、書記文字における誤脱書込みが即座に行われているものと推定できよう。

### 資料の公開状況について

大福光寺本『方丈記』の複製影印は、大正十五年(一九二六)二月廿八日に  
古典保存会から折本仕立てにして刊行され、次いで、昭和四十六年(一九七二)  
日本古典文学刊行会から原姿に忠実な卷子本仕立てにして刊行された。これ  
に基づいて、昭和五十一年(一九七六)四月、新典社「影印校注古典叢書11小  
内一明校注」が刊行されているので、比較的原典に接しやす資料といえよ  
う。この本書の書記者である鴨長明の筆者文字が他に残存すれば比較検討も  
可能であろうが、他に自筆資料は見出せないのである。語彙比較研究として  
は、青木伶子編『広本略本方丈記総索引』〔武蔵野書院、1965.10.〕や梁瀬一  
雄編『方丈記諸注集成』〔翻刻、豊島書房、1969.2.〕、同著『方丈記解釋大成』  
〔大修館書店、1972.〕がある。

### 本文書記文字について

漢字及びカタカナ文字表記による文章の書記方法が用いられ、漢字表記で  
は、漢語の熟字語と和語の単漢字表記が見て取れる。

〈漢字表記の語〉※今回、001行目〜100行目の漢字表記語を対象として茲に記載した。残り101  
行目から最後の333行目迄を同じように調査してみるのが大切である。

〈漢語二字熟語〉無常・春秋・東南・西北・一夜・塵灰・資財・灰燼・  
公卿・十六・男女・邊際・京中・京極・六条・資財・地獄・損亡セ・大  
臣・公卿・一人・主君・一日・領所・東北・庄園・内裏・古京・新都・

浮雲・土木・衣冠・布衣・瑞相・養和・飢渴シ・大風・洪水・五穀・  
〈漢語三字熟語〉不思議・朱雀門・大極殿・一二町・数十人・三四町・  
四五町・西南海・

〈漢語複合名詞の語〉二三十人・安元三年四月廿八日・七珠万寶・治承  
四年・治承四年・嵯峨ノ天皇・四百余歳・

〈返読語〉不知・不知・不知

〈漢語漢字省画文字表記〉023民下省・

〈漢語漢字カナ混用表記〉023大学レウ・

〈和語名詞の単漢字〉河・水・人・栖・棟・人・物・家・人・人・  
中・朝・夕・水・人・為・心・目・露・露・花・花・露・事・予・心・  
世・事・風・夜・時・火・風・扇・家・煙・焰・地・日・中・風・人・  
心・身・其・家・人・家・事・事・家・冬・風・煙・目・業・風・家・  
身・人・風・方・人・物・事・事・比・外・事・街・事・帝・世・人・  
人・時・世・所・人・日・家・地・島・人・心・人・事・今・街・所・  
南・海・風・木・地・人・所・地・今・人・事・車・馬・世・日・人・  
心・年・冬・街・家・様・國・殿・煙・時・民・世・今・世・昔・事・  
秋・事・秋・冬

〈和語他詞の単漢字〉尋レ・或ハ・或ハ・是・同シ・見・死ニ・生ル、  
・似リ・死ル・去ル・又・或ハ・或ハ・見ル・去・許・飛・如ク・或ハ  
・死又・或ハ・費エ・皆・侍ル・又・又・乱ル・如シ・如ク・彼・是・  
又・侍・也・此ノ・実ニ・悉ク・給ヒ・又・思・彼ノ・荒・皆・多ク・  
乱ル、・歸リ・給・悉ク・以テ・給フ・給フ・是・給フ・又・久ク・侍  
リ・或ハ・或ハ・

※「捨て仮名」…006昔シ。

〈和語複合字〉世中・世々・大家・小家・舞人・其中・取出ル・其外・  
惣テ・馬牛・卯月・片輪・御時・淀河・世中・御世・二年・世中・春夏

〔和語複合三字以上〕 桶口富ノ小路・三分カ一・中御門・手振里・

〔和語漢字カナ混用表記〕 016 アサ日・021 イヌノ時・043 ヅツシ風・050 吹タ

テ・058 ミノ月・062 世ノ人・063 事ハリ・071 馬クラ・073 ソノ時・076 山ノ中・

094 ミツキ物・099 事ノク

〔カナ表記の語〕 ※今回、001行目〜021行目のカナ表記語を対象として茲に記載した。残り022

行目から最後の333行目迄を同じように調査してみる事が大切である。

名詞 ナカレ・モト・ヨトミ・ウタカタ・タメシ・タマシキ・ミヤコ

・ウチ・イラカ・スマヒ・マコト・コソ・コトシ・トコロ・イニシヘ・

ヒトリ・フタリ・ナラヒ・アハ・イツカタ・イツカタ・カリノヤトリ・

タ・ナニ・アルシ・スミカ・サマ・アサカホ・モノ・ヨソチアマリ・ア

ヒタ・ミヤコ

動詞 ユク・タエ・アラ・ウカフ・キエ・ムスヒ・トマリ・アル

ナラヘ・アラソヘ・ヘ・ツキセ・アリ・ヤケ・ツクレ・ホロヒ・ナル

スム・カハラ・ウマレ・キ・ナヤマシ・ヨリ・ヨロコハシム・アラソフ

・ヲチ・ノコレ・ノコル・マツ・シレ・ヲクレ・ナリ・フキ

形容詞 ヒサシク・ナシ・タカキ・ヤシキ・ヲホカレ・ナシ

形容動詞 マレナリ・ワツカニ・コトナラ・ハケシク・シツカナラ

その他 シカモ・カツ・カツ・カク・ソノ・イハ・イヘトモ

・ヤハ・タヒ

助詞 ハ・シテ・ノ・ニ・ハ・テ・ニ・ト・ト・ノ・ノ・ノ・ニ

・ヲ・ヲ・ノ・ハ・ヲ・テ・ト・ヲ・カト・ハ・ハ・テ・テ・ト・モ

・ニ・モ・モ・ト・ハ・カ・ニ・ニ・ノ・ニ・ヨリ・テ・ヘ・カ

・カ・ニカ・ヲ・ニ・テカ・ヲ・ト・ト・ヲ・ニ・テ・ト・ヲ・ノ・ヲ

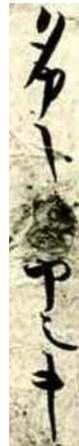
・ヨリ・ノ・ヲ・ニ・ノ・ヲ・ニ・カトヨ・テ・ノ・ヨリ

助動詞 ス・ス・タル・ル・ヌ・ナレ・シ・リ・ス・シ・ナリ・ケル

タリ・ル・ス・リ・リ・シ・ル・ヌ・サリ・シ

カナの古体文字表記一覧

「キ」



タカキ [イ]ヤシキ

「ク」



030 クレナ井ナル

「シ」



055 シラス



080 スクナシ

「タ」



260 ホタルハ

「ツ」



210 ウツサム



031 ウツ

「テ」



249 ヨチノホリテ

「ネ」



237 ヲモヒヤリテ

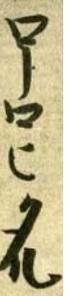
「ホ」



146 ツネナラス



262 ホロトナクラ



275 ホロヒタル

「マ」



231 サマタクル

「メ」



143 タメシ

「ワ」



247 スワノ田イ(「裾廻の田井」  
『万葉集』巻九・一七五八)

「キ」



088 ツ井ニ

気づきおくべきことば二つ

「あさ・ゆふ」と「あした・ゆふべ」【朝夕】の訓み方



※175 「アサユフスホキスカタヲハチテヘツラヒツ、イテイル」



※010 「朝ニ死ニタニ生ル、ナラヒ」は、なぜ「あした」「ゆうべ」と訓むのか？

「むま・うし」【馬牛】と「ギユウバ」【牛馬】の並列排列表記と訓み方



038 「数十人馬牛ノタクヒ」

※新大系は、「バギウ」と訓読。小学館は、「馬牛」と無訓読。大系本は「馬・牛のたぐひ」とし無訓ながら和語訓みを想定する中黒点を施している。



284 「財實牛馬ノ為ニ」

※新大系・小学館は、「牛馬」と無訓読。

因みに、「バギウ【馬牛】」の語は、室町時代の古辞書である広本(文明本)『節用集』に「<sup>フウ</sup>セル<sup>バギウ</sup>馬牛<sup>タモ</sup>不<sup>ズ</sup>相<sup>アイラヨバ</sup>及<sup>ズ</sup>也」君処<sup>ニ</sup>北海<sup>ニ</sup>寡人<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>南海<sup>ニ</sup>唯是風<sup>ノ</sup>馬牛<sup>不</sup>相<sup>及</sup>也。左傳僖四年傳「<sup>熊</sup>藝<sup>626</sup>⑦」と『日葡辞書』に「Baguin」<sup>ノ</sup>「邦訳471」と収載されている。この訓みを採用した新大系は大系とは、異

なる指針を茲に提示してきたことになる。だが、この訓みを本書に用いることが可能かは、この文脈との関連性を含め検討する必要があるのではないかと考えている。他の用例との比較も必要であろう。

漢字表記文字「京」(正体字)と「京」(通俗字)

本書には、二通りの文字表記が見えている。

1, 040 「京中」



2, 042 「京極」



3, 059 「京ノハシメ」



4, 074 「京ニイタレリ」



5, 080 「古京ハ」



6, 089 「京ニ歸リ」



7, 104 「京ノナラヒ」



8, 138 「京ノウチ」



9, 138 「北京極」



このように、書記者のなかで二つの表記字が用いられており、この長明の文字の素養と実際の書くという運筆行動意識を見ていくうえでも、同時代(鎌倉

時代中期)の他者の素養及び運筆行動意識とを以て比較して考察することが大切であろう。